ガラガラと扉が開く音がして、俺は目を覚ました。
視界には保健室の天井。

「昴(すばる)〜。大丈夫〜？」

そう言いながらベットを仕切るカーテンを開けて飯田(いいだ)先輩が入ってきた。ベットの横にしゃがみこみ、俺を心配そうな瞳で見つめている

「ちょっと調子悪かっただけで、寝たらもう直りました」

「そっか〜それなら良かった。教室に会いにいったら保健室で休んでるって聞いてビックリしたよ〜。……昨日私が無理させちゃったからだよね……ゴメンね？」

「…いえ。」

昨日――というか最近はほぼ毎日だが、俺と飯田先輩は食事と風呂を済ませた後は寝るまでずっと通話アプリを使って取り留めの無い話をしている。昨日は話が盛り上がって就寝時間を大幅に過ぎてしまったためにに今日体調を崩してしまったわけだ

「先輩は大丈夫？」
「授業中に寝たからオッケー」
「……」
「何い～その目…あっ、ってかお昼!!、今お昼休みなんだよ？」
「えっ、ほんとですか？思ったよりガッツリ寝ちゃったな……」
今が昼休みだと聞かされ、思い出した様に腹が空腹を訴える。
「今から学食行く？」
行きたいのはやまやまだが―…
「その…勃っちゃってて……」
「あ～…朝勃ち……じゃなくて昼勃ちかな？ははっ。昼でも勃つんだね～……よっと……あはっ♪ホントに勃ってる♪」
先輩がわざわざ布団を捲って確認してくる
「恥ずかしいんですけど…」
「今更ぁ～？」
そう言うと先輩は靴を脱いでベットの上に乗り、僕の身体を跨いで腰を落とした
チンコの腹に先輩の重さが乗っかって甘い疼きを覚える
「何してんですか？」
「ん～…お詫び？昨日の通話長引いたの私のせいだし」

気持ちいい～？
腰を左右や前後に揺らしながら先輩が問う
ヤバいですって!!
スリ
スリ

誰もいないし大丈夫だって♪
いやいや…治まんなくなるじゃん
射精(だ)しちゃえばいいじゃん
このままイったらヤバいことになるってっ
スリ
スリ

「それなら……昴、ちんちん出して」

先輩が腰をあげて促す、言われるままにベルトを外しズボンを下ろすと先輩は左手でパンツをずらし、右手に握った俺のチンコを秘所にあてがってくちゅくちゅと愛液を摺り付けた。既にかなり濡れて。

（パンツ越しだったけどさっき尻コキされてた部分も染みてるかもな…）

とか考えていたら、先輩が腰をゆっくり落としながらチンコを膣内へと咥え込んだ。端から押し出されるようにとろっとした愛液が溢れる。

淫靡な光景だ

お詫びとか言って
ホントは自分が
ヤりたかっただけ
じゃん
え～？ホント
だって～
ほら～私が
動いてあげるから
昴は楽してなよ～

はっ…
ん…っ♥
あんっ♥
あっぁ…
じゅッ
じぷッ
じゅッ

先輩っ…声っ
廊下まで聞こえちゃうってっ
ん…っ♥
だってぇ…昴のちんちん気持ちいいんだもん♥
じゅッ
じぷッ
じゅッ

…変態
良かったね～
彼女が変態で～
ガッコーでも
い～っぱいエッチ
できるもんね？
はぁ…
おっぱい
見せて
いいよ～？
じゅッ
じぷッ
じゅッ

どう？見える～？
めっちゃ旨そうに揺れてる
吸う？
この状況でそんなゆっくり楽しんでられませんよ俺は
んっ♥
じゅぷッ
じゅぷッ
じゅぷッ

え～…すぱっと
イっちゃう気？
ダメだからね
膣内に射精しちゃ
はっ？
膣内射精（ナカだ）され
ちゃったら私が
午後授業出れない
じゃん
私がイったら
その後に口で
イかせてあげる♥
じゅぷッ
じぷッ
じゅぷッ

いやいや ありえねーから
あっ♥
あ～タメロぃ～。一年の癖に～
ぜってぇ 真美ん膣内 射精すからな
そのうえ 呼び捨て～
あんっ♥
じゅぷッ じぷッ じゅぷッ

真美がイく前に速攻イってやる
ちょっとぉ それは無しでしょ～
射精していいから 膣内にぃ
だから私がイくまではちゃんとしてよぉ
じちゅッ じぷッ じちゅッ

つってももうイきそうなんですけど？

もうちょっと…もうちょっとでイきそうだから…

…ッ先輩っ!!

…あ♥いいっいいよっ

私っ…イッイク…ッ

じゅッ じぷッ じゅッ

あハッ
はッ♡
はッ♡
ンン♡
ぐッ!!
ぶぢゅッ
ぶぢゅぢゅッ

ホントに射精しちゃっても～…
こんなんじゃ授業出れない♥
サボる？
じゃぁ俺も
ん～…帰ろっかなぁ
ふふっ…私ん家で続きしよ♥